

MONGOLIA

学校名：吉川市立関小学校

氏名：朝倉 敦美

[担当教科：全教科]

- 実践教科等：国語
- 時間数：12時間
- 対象生徒：2学年
- 対象人数：31人

1 単元名 スーホの白い馬

2 単元の目標

場面の様子を想像しながら物語を読む。

○場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むことができる。

(多面的、総合的に考える力)

○物語から心に残った言葉や文を書きぬき、自分の経験と結び付けて、感想をまとめ、交流することができる。

(コミュニケーションを行う力)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る | 2 子供の多様な考えを引き出す |
| 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する | 4 考えるための材料を見極めて提供する |
| 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する | 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する |
| 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る | |

4 単元の指導について

(1)教材観

「スーホの白い馬」では、スーホと白馬の心の交流を軸に馬頭琴という楽器が作られた経緯が語られていく。今まで学習してきた作品よりも長文だが、動物との温かな絆が描かれ、一つ一つの場面が印象的であり、感動的である。特にスーホと絆を深めてきた白馬の死は、児童たちにとって、衝撃的で心に深く刻まれるであろう。しかし、夢に出てきた白馬の言葉によってスーホの気持ちが変わっていく。自分勝手な殿様に対する怒りや白馬を失った悲しみでいっぱいだったスーホの心がどんな風になら変わったのかを考えさせたい。

そして、「スーホの白い馬」はモンゴルの人々が大切にしてきた古くから伝わる民話をもとにした作品である。モンゴルで得た教材を使用し、モンゴルの世界に浸らせながら読み進めたい。さらに日本を含む世界の国々で先人から読み継いできた昔話にも興味を持たせ、紹介できるようにしたい。

(2)児童観

これまで児童たちは、「スイミー」「お手紙」等の作品を通して、場面の様子や登場人物の気持ちを想像しながら音読劇をしたり、感想を書いたりしてきた。音読劇では、台詞を暗記し、登場人物になりきって悲しみや喜びを表情や動きで表すことができた。感想を書くときは、学習した物語の登場人物に愛着をもち、どんな気持ちなのか想像しながら読んでいた姿が見られた。多くの子は登場人物の心情を文章から読み取ろうと何度も声に出して読み、想像を膨らませている。

児童にとってモンゴルは初めて知る国である。モンゴル人が騎馬民族であることや馬乳酒やナードムが生活の一部であり、馬がモンゴル人にとってとても身近な存在であることを児童は知らない。そこで児童がスーホという人物、さらには物語の舞台となっているモンゴルについて理解することで、さらに登場人物の心情に迫れるのではないかと考えた。モンゴルで収集した写真や動画を見て、そうしたスーホの背景を理解することでスーホがどうして白馬とこんなに心を通わせることができるのか、どうして白馬を失ったときそんなに悲しんでいたのかということを考えさせたい。

(3) 指導観

- 現地の写真や映像を使用し、個人やグループで考える時間をとることで、スーホの文化的背景を知ること、スーホの心情に迫るようにしたい。
- 授業の後半に音読を取り入れた。スーホのくやしやかなしさ、ずっと白馬と一緒にいたいと願う強い気持ちに迫ることで、スーホの心情を想像しながら、心をこめて音読できるようにしたい。
- 「スーホの白い馬」は、今まで学習した物語の中で最も長く、苦手意識を持つ児童もいた。そのため、実物の資料を多く取り入れ、興味・関心を引き出したい。

5 評価基準

観点	ア 国語への 関心・意欲・態度	イ 話す・聞く能力	エ 読む能力	オ 言語についての 知識・理解・技能
評価規準	・主人公の行動や会話に注意しながら物語を読み、感想を交流している。 ・登場人物に興味を持ち、環境や心情を理解しようとしている。	・本文を読み、考えたことや感じたことを発表し、友達との違いに気をつけて聞いている。	・登場人物の行動や会話から場面の様子をつかみ、想像を広げて読んでいる。	・本文には様々な複合語があることに気づき、語幹の違いを理解している。
評価方法	観察、ノート、ワークシート、発言	観察、発表、ワークシート	ノート、ワークシート	ワークシート

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1 ・ 2	「スーホの白い馬」を読んではじめの感想を書き、グループで話し合う。	関心を持って作品を読み、主人公の気持ちを考えながら感想をまとめようとする。	・範読を聞き、物語の全文をとらえる。 ・初発の感想をまとめ、交流する。
3	場面わけをしよう。	「いつ」「どこ」「だれ」を意識して場面わけをする。	・前ばなし場面を用いて「いつ」「どこ」「だれ」を整理し、場面わけをする。
4 ・ 5	あらすじをまとめよう。	中心人物の行動や会話に注目し、物語のあらすじを工理解する。	・穴埋め方式のプリントを用いてあらすじのまとめ方を学ばせ、まとめる。
6	クライマックス場面について考えよう。	クライマックスの場面において、中心人物の気持ちの変化、その理由をとらえる。	・クライマックス場面について考える。 ・何がどう変化したのか、変わったのはどうしてなのかを話し合わせる。
7	モンゴルについて知ろう。	モンゴルの文化や生活について触れることで登場人物の心情をより深く理解する。	・モンゴルの物や写真を見てスーホがどのように生活していたのかを知る。 ・モンゴル人にとって人と馬との関係はどんなものかを知る。 ・馬頭琴の音色を聞く。
8	作品の心を考えよう。	作品が最も伝えたいことをペアでまとめる。	・作品が最も伝えたいことを考え、ペアで話し合い、まとめる。 ・複合語について理解する。
9	最後の感想を書こう。	より深くスーホのことを理解したうえで感想を書き、初発の感想と比べる。	・前回までの授業で学んだことを踏まえてもう一度感想を書く。 ・自分が書いたはじめの感想と比べ、お話を想像しながら読めるようになったかふりかえる。

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

10	感想を伝え合おう。	グループで感想を伝え合い、友達との違いに気をつけて聞く。	・グループで感想を伝え合う。 ・最初の感想と違うところに着目し、どうして変わったのか話し合う。
11	色々な国の人が大切にしてきた物語を読み、紹介しよう。	友達との違いに注意して、発表を聞く。	・色々な国の昔話や、その土地に伝わるお話を、想像をはたかせながら読む。 ・読んだ本をプリントにまとめグループで発表する。
12	好きな自分の国の物語を紹介しよう。	自分の知っている物語のあらすじを話し合っまとめ、発表する。	・好きな自分の国の物語のあらすじを書き、グループで話し合う。 ・一冊の本にし、発表する。

7 授業事例の紹介

小単元名【モンゴルについて知ろう。】

(1) 指導案

(ア)実施日時 1月26日(木)第5限

(イ)実施会場 2年4組 教室

(ウ)本時の目標

モンゴルの文化や生活について触れることで登場人物の心情をより深く理解する。

(エ)指導のポイント

- ・グループに一つずつ写真を配り、話し合わせることで一人一人の児童が主体的、積極的に考えられるようにする。
- ・現地の人たちの生の声を聞くことでスーホにとって白馬がどれだけ大切だったか児童の心に響くようにする。

本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
5分	1 本時の課題を提示する。	・本時の課題をつかむ。	一斉		
	どうして白馬のすがたをかえてまで、スーホは白馬といっしょにいたかったのだろう。				
10分	2 モンゴル生活クイズをする。	・いくら仲がいい動物でも死んじゃったら終わりじゃないかな。 ・どうしてそこまで まで していっしょにいたいのかな。	グループ	・白馬を楽器に変えてまで一緒にいたかったスーホの気持ちについて考えさせる。	
10分	3 モンゴル人にとって馬とはどんな存在か動画を通して知らせる。	・動画を見て、モンゴル人にとって馬とはどんな存在か知り、自分の意見を発表する。	個人	・教師の話だけでなく動画で現地の人々の生の声を聞くことで説得力を持たせる。	
7分	4 馬頭琴の演奏を聞かせる。	・馬頭琴の演奏を聞き、どんな感じがするか考え、発表する。	個人	・友達の考えと自分の考えを比べられるようにする。	

7分	5 スーホの心情をもう一度考えさせる。	・本日の学習を踏まえて、スーホのクライマックスの場面の心情を、もう一度考える。 * モンゴルの人にとって馬は家族なんだ。だからスーホは白馬といっしょにいたかったんだな。 * スーホの白馬を思う気持ちが馬頭琴のかなしい、きれいな音なんだな。	グループ	・モンゴルについて初めて分かったことからスーホの生活や白馬に対する思いを想像させ、感想を書かせる。 ・現地のモンゴル人通訳ダワさんの話を思い出させ、書き出しを助言する。	エ 登場人物の行動や会話から場面の様子をつかみ、想像を広げて読んでいる。 〈評価方法〉ワークシート
5分	6 クライマックス場面を音読させる。	・クライマックスの場面を音読する。	個人	・スーホの気持ちの変化に気をつけて全文プリントを用い、音読する。	
1分	7 次時の学習内容を知らせる。	・次時の学習内容を知る。	一斉		

(2) 授業の振り返り

- ・モンゴルで収集した画像や映像を活用した結果、児童にモンゴルの雰囲気をよく伝えることができた。
- ・教室掲示の国語コーナーは、モンゴルの情報が充実していた。
- ・モンゴルという国への児童の興味・関心を高めることができた。
- ・グループで話し合わせる前に、一人でじっくり考える時間を取った方がよかった。
- ・1時間に2回の話し合い活動を取り入れたため、時間を超過してしまった。これからは1時間に1回の話し合い活動をしっかりさせることで児童の考えを深めていきたい。
- ・導入の場面で「どうして白馬のすがたをかえてまで、スーホは白馬といっしょにいたかったのだろう」という課題をもっとしっかりおさえるべきだった。それが文化的背景を学ぶ動機につながる。
- ・モンゴルの生活クイズの場面では、全て馬に関連するものを出すとモンゴル人にとって馬がどれだけ身近で大切な存在か児童は感じる事ができた。
- ・馬頭琴の演奏を聞かせる場面では、もっと曲を吟味すべきであった。
- ・交流の場面でグループでの話し合いの際、司会、記録、発表者などの役割分担を明確にすべきだった。消極的な子が積極的な子の意見に流されてしまったり、発言の機会が少なくなったりという場面が見られた。
- ・ワークシートは写真を取り入れ、児童にも分かりやすいようにした。裏面には、振り返り欄を設け、児童が授業で何を感じとったのかを明確にできるようにしたにも関わらず、時間を超過してしまったので、十分に考えさせることができなかった。これからは、時間に考慮し、授業を計画していきたい。

(3) 使用教材

①馬頭琴、民族衣装



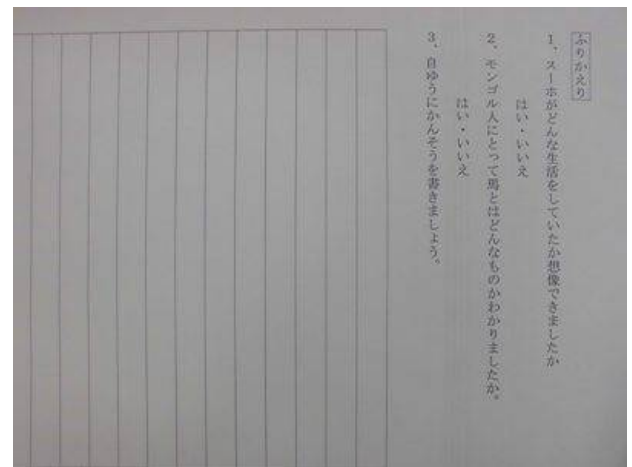
②ゲル、ポーズ、馬乳酒、シャガイ、マニ車、などモンゴル人の生活が分かる写真



③遊牧民のゲルを訪問した際、出会った少女、新モンゴル高校の生徒、通訳ダワさんへの馬についてのインタビュー映像

④馬頭琴の演奏の映像

⑤ワークシート



(4) 参考資料等

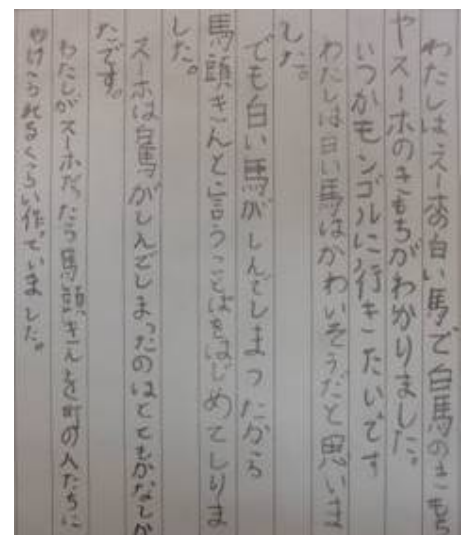
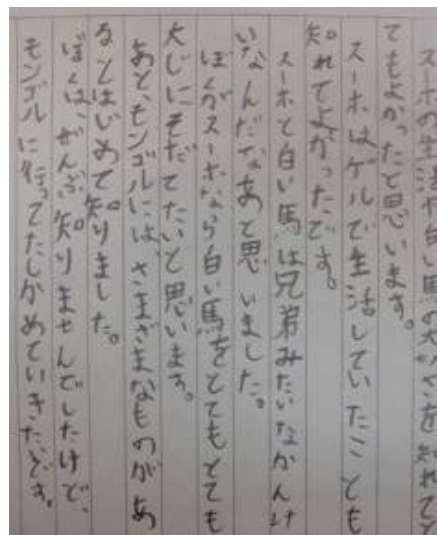
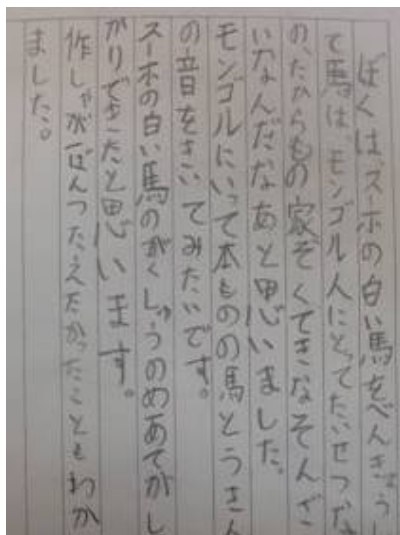
- ・評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 国語】

(文部科学省 教育出版 平成23年11月)

- ・日本ユネスコ国内委員会 学習指導要領におけるESD関連記述

(<http://www.mext.go.jp/unesco/004/1339973.htm>)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化



授業の感想

何よりの成果は、この授業を通して初めは長くて難しいと感じていたこの物語が児童にとって楽しい物語になったことである。音読の宿題を進んでするようになった。

そして、児童はモンゴルという国が大好きになり、もっと知りたいと思うようになった。海外への興味を引き出すことができた。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

2年生で「スーホの白い馬」を扱うため、海外派遣前から馬頭琴について、馬とモンゴル人との関係について、モンゴル人の生活について学び、児童に伝えようと計画していた。海外派遣中、日本とモンゴルの友好関係を知り、それを授業に取り入れたいと感じた。しかし、国語の授業で取り入れるのは困難であった。そこで、「スーホの白い馬」を通してモンゴルに触れ、よく理解させることが児童にモンゴルに対する友好的な感情を抱かせることにつながると考えた。そこで、モンゴルで収集した資料に加え、児童に分かりやすいようパワーポイントやワークシートなど教材を作成し、授業を実践した。

授業実践の成果としては、教師が実際にモンゴルに行って収集した資料を使用することで児童の心に響いたことがあげられる。収集した膨大な資料から厳選し、掲示のタイミングを工夫することで、児童の自由な発想を妨げることなく、さらに異文化に対する興味・関心を引き出すことができた。また、対話のある活動を取り入れることで、児童の考えが深まるとともに、多面的に物語を捉えなおすことができた。

課題としては、モンゴルの子供たちと交流できる素晴らしい機会を得たにもかかわらず、それを教育計画に位置付けることができなかったことがあげられる。また、これから担任として、また、国際理解教育主任として積極的に提案していきたい。そして「日本とモンゴルの友好関係」についての授業を学級活動等で計画したい。

P(計画)本単元の目標「場面の様子を想像しながら物語を読む。」を念頭に置き、モンゴルで馬に関するインタビューや馬頭琴など資料集めをし、どうすれば有効に資料を使えるかを考えながら指導案を作成した。

D(実施)ねらいを達成するために、写真や映像を活用するとともに話し合い活動を取り入れ、スーホの心情を考えさせた。

C(検証)資料やワークシートは適切だったか、先輩教員から指導をいただいたり、児童のノートやワークシートを見直したりし、改善策を練った。

A(改善)資料をもう一度見直したり、児童がじっくり考える時間を確保したりすることで、今後さらに単元の目標に迫れるよう指導案を修正した。また、資料は他教科、他学年でも共有し、いつでも使用できるようにした。

10 教師海外研修に参加して

今回の研修で、心に残っている言葉がある。「日本とモンゴルは現在とても仲がいいんですよ、と日本の子供たちに是非伝えてください。」モンゴルの日本大使館に訪れた際、参事官の方がおっしゃっていた。モンゴルと日本は互いに理解し合い、支援し合ってきた。相手を知り、認めることの大切さを自分自身、感じる瞬間だった。外国籍の児童だけではなく、一人一人、違うところがあり、それを認め合うことの大切さやおもしろさを児童にも知ってもらいたい。

また、支援を必要とする国の社会情勢、歴史、困窮している根本的な原因、環境問題、技術協力の方々との出会いなど、児童に伝えたいことがまだまだたくさんある。2年生には、難しく授業で扱えなかったことを来年以降、活かしていきたい。

この教師海外研修で得た知識、経験をこれからも児童に伝えていく。